

北京語と広東語に対する言語意識の比較

—中国人を対象としたWEB アンケート調査の結果から—

李 丹(専修大学大学院生)

1. 研究目的

言語意識は社会言語学の分野において極めて重要な領域の1つである。日本では、1980年代から1990年代にかけて、日本全国を対象とした言語意識(方言意識)に関する研究が盛んに行われた。方言と標準語に対する言語意識に関する代表的な研究は、日本では井上(1978a; b)、佐藤(1996)と佐藤・米田(1999)がある。

一方、中国においても日本と同様に言語意識(方言意識)の研究が行われた。しかし、広大な国土と多くの少数民族の存在により、地域ごとに特徴的な発音や習慣を生まれた。そのため、南部と北部では、使用される言語が著しく異なっている。このような状況の中で国家の統一と国民の団結、さらには社会進歩を実現するために、1950年代に全国で標準語政策(普通话)が立てられた(翟, 2018)。しかし、多様な方言が使用されている中国において言語の統一を推進した結果、自らが日常的に使用する言語が劣ったものであるという認識が生まれた(夏, 2012)。一方、鄂(2016)によると、内モンゴル自治区では、モンゴル語とモンゴル文字の保護と教育がさらに重視されている。つまり、マイノリティの言語や文字を保護しようとする姿勢は非常に明確である。にもかかわらず、内モンゴル語教育が衰退していると指摘している。上記のような言語背景がある中国の言語意識の実態およびその仕組みを明らかにすることが重要である。そのため、本稿は、中国語母語話者の北京語と広東語に対する言語意識の相違点について明らかにする。

2. 先行研究

中国においては少数民族における言語意識の調査は王(2009; 2021)と孫(2011)などがある。彼らはフィールド調査やインタビュー調査などの方法を用い、少数民族が居住している地域における個人の属性(性別、年齢、学歴など)、言語習得、言語使用、言語態度などを調査した。王の調査結果によると、標準語の社会的地位は、それぞれの母語や母方言に比べて高く評価された。これは、実用的な機能や将来への期待感の影響だと推測される。一方孫は、公的・私的の場面にかかわらず標準語の使用率が高いことを指摘している。

また、鄂(2007)及び包(2008)は主にアンケート及びインタビューを用い、大学生を調査対象者とした少数民族の言語意識に関する研究を行った。調査の結果、民族語の使用、方

言能力、方言態度については、それぞれにおいて正の相関が見られた。そして標準語に対する言語評価は、男性よりも女性の方が高いという結果になった。一方、包の調査では、調査対象となった言語に対する言語態度を、認知や用途などの側面から明らかにしている。その結果、標準語が高く評価された一方で、民族語に対する評価が低いことが示された。一方、民族語と標準語では同様の役割を果たしていることが明らかになった。さらに、民族語に対して好意的イメージがあるが、標準語に対しては非好意的な評価をしていることがわかった。

上記の論文で述べたように、中国における言語意識に関する研究の大半は、少数民族地域や少数民族を対象に行われてきた。多民族・多文化国家である中国においては、このような少数民族の言語や文化に関する研究の必要性は否定できないが、少数民族地域の言語だけでなく、中国の主要な方言に関する調査も必要である。したがって本研究は、北京語と広東語に対する言語意識の相違点を明らかにし、さらに性別・年代・職業などの社会的属性による差異を検討する。

3. 研究方法

本稿は井上(1980)の評価語の選定方法を参照し、『分類語彙表』から評価語を抽出し、中国語母語話者の判断により23対の評価語を選定した。その評価語について、性別・年代・職業などの社会的属性による差異を考慮した上で、WEBアンケート調査票を作成した。データ収集に際しては調査会社に委託し、北京に在住している中国人を対象に北京語と広東語に対する意識調査を行った。調査方法は、210人に対してSD法により対象となる評価語を7段階で評価してもらった。調査対象となった方言は、官話方言、吳方言、贛方言、湘方言、粵方言、閩方言、客家方言の7つであり、調査対象となった地域は、東北地域、華東地域、華北地域、華中地域、華南地域、西南地域、西北地域の7つであり、それぞれにおいて t 検定および数量化Ⅲ類を用いて分析を行った。

4. 調査結果

(1) 7つの方言の好悪

対象となった7つの方言の中で、官話方言に対する評価が一番高かった。一方、贛方言に対する評価は低かった。また湘方言においては、性別と年齢層に有意な差が見られた。

(2) 7つの地域の好悪

華北地区に対する評価が一番高く、西北地区に対する評価は低かった。また、年齢及び職業においては有意な差が見られた。

(3) 広東語と北京語に対する評価

広東語における評価語を数量化Ⅲ類を用いて分析した結果、5つの軸が抽出された(表1)。菅(1993; 2017)によると、相関係数が0.3以上を超えた場合にアイテム・カテゴリーとサンプルの間に相関が認められる。したがって、広東語に対する評価の分析結果は、

全ての軸において統計的に説明力があると考えられる。一方、第1軸と第2軸における相関係数は、他の軸よりも高く示されている。したがって以下では、第1軸と第2軸を中心に解説していく。

表1 分析精度 (広東語に対する評価)

軸 No	広東語に対する評価				
	1	2	3	4	5
固有値	0.29	0.17	0.13	0.12	0.12
寄与率 (%)	15.69	9.10	7.16	6.69	6.18
累積 (%)	15.69	24.79	31.96	38.65	44.83
相関係数	0.54	0.41	0.37	0.35	0.34

第1アイテムスコア得点と第2アイテムスコア得点をまとめた散布図は図1になる。散布図に注目すると、図の左半分(第2象限と第3象限)に「分かりにくい」、「複雑」、「聞きづらい」、「不変」、「古風」、「カジュアル」、「不便」、「私的」がグループを形成している。また、図の右半分(第1象限と第4象限)に「憎い」、「汚い」、「恥ずかしい」、「ぞんざい」、「下品」、「つまらない」、「田舎風」、「不安」、「弱い」、「一樣」、「一般」、「普通」などがグループを形成している。評価語の位置づけという観点から見ると、広東語に対する評価は以上の2つのグループに分類されることができる。さらに、評価語間の距離に注目すると、各グループにおける強い結びつきが証明されたと言することができる。

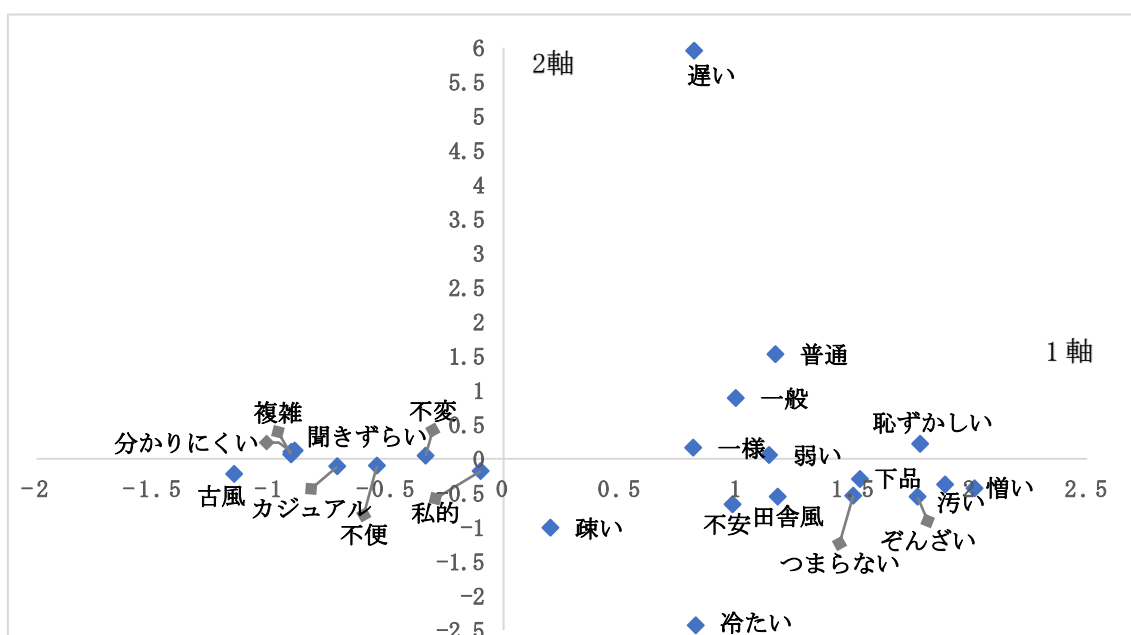


図1 散布図における広東語評価語の位置づけ

5. 結論

(1)と(2)の結果から、官話方言を代表とする大都市の方言及び地域に対する評価は高いことが示された。このことは、経済・文化・政治の中心となる大都市は他の方言及び地域と比べ周知度が高いことが影響していると考えられる。また、湘方言に対する評価は、性別と年齢層において有意差が見られた。これは、湘方言には多数の下位方言が存在していることに加え、バラエティーや文学などが影響していると考えられる。

(3)の結果から分かるように広東語に対する評価は大きく2つのグループに分類される。この2つグループは、評価語の意味からも関連性が認められる。つまり、「分かりにくい」、「複雑」、「聞きづらい」、「不変」、「古風」などの評価語は広東語の特徴に対するマイナス評価である一方、「憎い」、「汚い」、「恥ずかしい」、「ぞんざい」、「下品」などの評価語は感情に基づくマイナス評価と言える。このように、広東語の特徴に対する評価と、評価者が広東語に対して抱く感情が、広東語そのものの評価と密接な関係があることが明らかにされた。以上のような調査方法を中国の他地域についても採用することで、中国の言語意識の実態を把握することに貢献できると考えられる。

参考文献

- 包冬梅 (2008). 在京蒙古族青年语言使用及语言态度调查, 修士論文, 中央民族大学
- 井上史雄 (1978a). 方言イメージの多変量解析—上—, 言語生活, 311, 82-91
- (1978b). 方言イメージの多変量解析—下—, 言語生活, 312, 82-88
- (1980). 方言イメージの評価語, 東京外国語大学論集, 30, 85-97
- 夏厉 (2012). 城市农民工语言态度调查研究, 社会科学战线, (01)
- 菅民郎 (1993). 多変量解析の実践—上— 現代数学社
- (1993). 多変量解析の実践—下— 現代数学社
- (2017). 多変量解析—因子分析・コレスポンデンス分析・クラスター分析— オーム社
- 佐藤和之 (1996). 方言主流社会東北篇—共生としての方言と標準語— おうふう
- 佐藤和之・米田正人 (1999). どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ— 大修館書店
- 邬美麗 (2007). 在京少数民族大学生语言使用及语言态度调查, 博士論文, 中央民族大学
- 翟程 (2018). 二十世纪50年代《人民日报》推广普通话运动的舆论动员研究, 吉林广播电视大学学报, 132-135
- 王远新 (2009). 青海同仁土族的语言认同和民族认同, 中央民族大学学报, 第5期第36卷
- (2021). 三亚市中廖村的语言生活变迁, 语言文字应用, 8月第3期
- 孫德平 (2011). 语言认同与语言变化江汉油田语言调查, 语言文字应用, 2月第1期